

小堀桂一郎著

『鈴木貫太郎 用うるに玄黙より大なる  
はなし』 (ミネルヴァ書房、二〇一六年十一月)

稲賀 繁美

海軍の軍人として大将の地位に登りつめ、侍従長を務めたうえで、総理大臣として齢七十代の末に第二次大戦の終戦処理の任を担った人物の評伝である。同じ著者にはすでに三十余年を遡る昭和五七年に『宰相鈴木貫太郎』があり、これは刊行当時大きな話題を撒いた。今回の著書は、『宰相』で扱った終戦工作についての記述についても、その後の資料や研究の進展をうけて一新された展望を示す傍ら、その間『鈴木貫太郎自伝』の校訂に従事した経験を生かして、この人物の軍人としての履歴や勲功についても、間然するところなき、過不足ない叙述を与えている。この高邁なる著書を評するにおよそ不適格なことは自覚しつつ、敢えて稚拙な筆を執る。それは評者自身が、年齢のしからしむるところ、官僚機構の様々な理不尽さに日々苛まれるなかで、帝国憲法下の日本海軍に生きた人物の事績とその置かれた環境の復元とに、思わぬ指針や教示を受けることが少なくなかったからである。以下、通常の学術書に対する学術誌での書評とは性格を異にする筆法に及ぶことをお断りする。

まず特筆すべき本書の達成は、海軍という組織のなかで履歴を形成したひとりの傑出した人物の人となり、その経歴や経歴を通して浮かびあがらせることに成功した点にある。一見あたりまえと映るかもしれない。だが、概して評伝は主人公の特質を際立たせるあまり、周囲との人間関係において均衡を欠く結果を招き易い。著者のみるところ、太平洋における日米戦争に重なる時期に口述筆記された自伝原稿から察するかぎり、鈴木貫太郎は自らの実績を誇ることにきわめて恬淡な人物であった。その控えめな口伝の背後にいかなる真実が隠されているか、筆者はそれを必要な慎重をもって、さりげなく掘り起こして浮彫りにして見せる。日露戦争における雷撃の戦功を徒に誇らず、同僚の艦隊に一隻分の勲功を譲る寡欲な態度。それが組織における人間関係の信頼を生む機微は、追って海軍次官としての意外なほどの活躍への伏線となる。さらに艦長としての操艦の失敗や直面した事故。誤って米艦に雷撃を掛けそうになった「まあとんだ失敗といふべき初陣の為體」(三二六頁)という日清戦争、旅順港外での逸話から始まって、それらの体験がその後の人生の分岐点、困難な決定に際して、体で学んだ貴重な教訓として巧まずして生かされ、鈴木ひとりの栄辱、ひとり海軍の名譽を越えて、国家ひいては国際関係にまで裨益してゆく。その経路が、巻を通読すると自ずと納得されるところに、筆者の尋常ならぬ力量もある。

本書は創成期日本海軍の窮状を末端の実情から描き、それを克服する明治人の心意気を活写する。鈴木は欧州留学のさなかおりから風雲急を告げる日露関係ゆえに、ジェノヴァでまだ艦用語に関する貴重な教示を着実に生かした、筆者の蓄積が隠されている。

大正三年に成立した大隈重信内閣下で、鈴木は翌年に海軍次官を拝命し、折からの欧州大戦に際して、戦時軍事費による駆逐艦十隻の建造費を認めさせる工作に成功する。八代海相にも無断のその「確信犯的」な「独断」ぶりに、大隈は「水雷艇」の紳名を授けたという。水雷の専門家が、その名のとおり夜討ちの肉薄接近という奇襲により政界工作で戦果を挙げたためである。それを筆者はこう評する。「鈴木は意外に巧みな議会向けの政治工作の絡線を覗いて見て言へる事は、彼は確かに所謂根廻しを試みて成功してゐるが、その手法は決して「策士」のそれではない、といふ事である。狙ふべきつばを見抜く眼力はあるが、それに立ち向かふ姿勢は正攻法で理を説く以外のものではない。ただ大隈がからかつた様に、奇襲といふ戦術には長けてゐたと評することはできよう」(一六一頁)。けだし明察といふべきだが、同時にここには著者・小堀氏の鈴木貫太郎像が、集約されている。この才覚は、関東大震災の折に命令を待つことなく実施した救援物資輸送にも発揮される。

鈴木貫太郎の最後の大業となったのは、前述のとおり終戦処理の折の総理職である。この文脈で、著者は慎重に明言を避けられておられるが、評者として看過できないのは、鈴木が生粋の船乗りであり、また連合艦隊司令長官をも歴任した事実である。明治四二年に二等巡洋艦「宗谷」艦長となった鈴木は、翌年、練習航海で豪州に向かう。寄港地での見聞も本書の読みどころのひとつだが、平時の海外寄港が国際社交上いかに重要だったか

装束上の新造艦「日進」の日本への回航を命じられる。厳寒の日本に近づくと、苦力たちは空の石炭袋を貫頭衣よろしく重ね着して寒風に堪える。かれらに横浜で古着を買い与えたアームストロング社のボイルという英人と鈴木との交流からは、八か国に渡る「鳥合の衆」に頼んでの厄介かつ珍妙なる回航の情景も目に浮かぶ。続く日露戦争の黄海海戦では、「春日」副長の鈴木は、敵艦隊追跡の折、交戦までになお時間的に余裕があるとみて、乗員に食事を摂らせ、煙草も許す。「常に心を静謐に保ち危急に臨みてなほ沈着なる態度を維持すべし」(一四四頁)。鈴木が後に江田島の兵学校で論じた教訓だが、実践で培ったこの泰然たる態度が、周囲への目配りや状況観察に余裕を与えた機微も窺える。

右の事例からも明らかのように、本書は堅苦しいばかりの硬骨漢の英傑傳からは程遠い。二二六事件で殺害必至という場面に見せた剛毅さも含め、危機に瀕して自ずから発揮される鈴木大将の泰然自若たる余裕。それが、父の薫陶や、若き下士官時代の海軍の先達たちとの交わりから、ゆくりなく育成されていった様子もまた、行間より彷彿と立ち昇る。珍談も交えつつ、ほのぼのとしたペースさえ漂う、肩からも力の抜けた筆致ごしに、鈴木貫太郎という人物の端倪すべからざる器のほどが、過飾なく伝わってくる。だがこうした印象に騙されてはなるまい。そこには帝国海軍という組織の発展や煩瑣な昇任序列も含めた組織原理(とそれへの鈴木疑念)、さらには大正期から昭和期にいたる政治史に関する(その現時点での不透明も弁えた)筆者の確実な知識、生き残りの海軍経験者から得た海軍・技術

は、現在では容易に理解し難い。その航海での逸話として、著者は鈴木は操船上の信念に言及している。狭く海流の速い海峡で、とりわけ小型漁船などが奔めいている場合、大型船の小刻みな針路変更は禁物である。だが針路と速度さえ安定させておけば、機敏な小艦艇は自ら転進して危機を脱しうる(一四〇頁)。さらに鈴木は大正一三年には連合艦隊司令長官に補任される。青島・厦門周航のおり、奄美大島周辺で旗艦「長門」によって「陸奥」を牽引する曳船実験に及ぶが、三万トンを超える両巨艦のあいだには想像以上の吸引力が働き、あわや両艦が艦首から衝突する大事故を危うく回避した(二三〇頁)。およそ巨大な機関が周囲を惹きつける力は侮り難い。とはいえ大艦が岸壁に接触しかねぬ局面では、潮が艦体を押し返してくれる。そうした理路や人知を超えた自然の摂理を、鈴木は身をもって知悉していた。国家という咄嗟の舵取りには応じぬ巨大な機関の命運を握る操艦長として鈴木貫太郎が大役を全うした裏には、こうした実体験の蓄積があった。軍艦は「人民」の労苦の結晶であり、かつて外国から回航した「日進」ほか、山本権兵衛に言わせれば「陛下のお買い上げ」だった。その結節点に海軍という組織に対する鈴木理解「国體護持」も位置していた。さらに航海長と艦長、艦長と司令官との二重の安全装置がなければ航海は容易に危機に瀕する。この教訓も総理大臣としての鈴木は心身にはしみ渡っていたはずだ。

鈴木が国政に臨むその具体的な判断。それを検証するには、紙面が尽きた。最後に、大正六年の練習航海による米国訪問に触れておきたい。サンフランシスコで鈴木はさるカリフォルニ

ア大学名譽教授から、米国の普通選挙制に関してこの国には三つの弱点がある、と聞かされる。昨今の時事的な言い回しに翻訳するなら、民衆迎合の政治扇動と、それに乗せられやすい選挙民、政治家の名利追求、そして金融資本の暴走（一八二頁）。山梨勝之進にも卓抜な米国氣質の分析が知られるが、現代にもそのまま通用する米国事情の観察といつてよい。戦前の、日本帝国憲法下では、海軍の高級軍人がこうした事情を弁える位置にあつた。それをもはや無意味な過去として忘却するのは、今日、かえつて危険であらう。

評伝という読み物の形を採りつつ、過去の叡智を現代に伝える役割を、本書はそうと声高に主張することなく、穏やかな口調と筆遣いで果たしている。文献史料の精査を尽くし、歴史体験者の観察の細部を大切に生かしながら、その生涯を、ひとつの解釈のもとに筆を慎みつつ描ききる。その営みに静謐な喜びを感じさせる著者円熟の文業に、政治的な立場の異同を超えて、あらためて敬意を表したい。

\* なお仔細な誤植を論うのは意図ではないが、勲章名は Grand Officier de l'ordre national de la Légion d'honneur（一七六頁）、またタスマニアの珍獣の名は「オボッサム」（二二七頁）だろう。

（本稿は元来 D・トランプ氏が米国次期大統領に選出された翌週、二〇一六年十一月二日に執筆したが、諸般の事情で未公開となっていた。）